

アウレリアヌス帝の「太陽神」崇拝について

井上文則

軍人皇帝時代の皇帝アウレリアヌス（在位 270 – 275 年）の主要な業績が、当時の政治的混乱の中、分離国家として独立していたパルミラとガリアの勢力を打倒し、ローマ帝国を再統一したことにあることは言うまでもないが、彼にはもう 1 つの大きな業績があった。それは、太陽神崇拝の「国教化」である。

通説的な説明によれば、アウレリアヌスは、対パルミラ戦で自らに天助を授けた太陽神、すなわち不敗の太陽神ソル・インウィクトゥスの信仰を国家宗教として導入し、この行為を通して、帝国を政治的に統一するだけに留まらず、精神的にも統一しようと目論んだのであり、引いてはこの信仰を利用して帝権の強化をも図った、とされているのである。そして、このアウレリアヌスの宗教政策は、コンスタンティヌス帝のキリスト教に対する対応と同一傾向の、先駆的現象として歴史的に位置付けられてきた。また、このアウレリアヌスの太陽神崇拝の国教化は、具体的に、3 段階を経て実現したと考えられている。第 1 段階として、アウレリアヌスは、太陽神の名を銘打った貨幣を発行することで、太陽神がローマの国家神となることを公的に宣言し、第 2 段階としてはローマ市に太陽神の神殿を建立する。そして、第 3 段階として、太陽神に奉仕する神官団を創設したとされるのである。

このような通説的理解は、ニュアンスに多少の違いはあるが、外国では L・オモや G・H・ハルスベルゲの研究に、わが国では弓削達氏や中西恭子氏の研究に見ることができる。しかし、アウレリアヌスの宗教政策については、近年、この皇帝の伝記的研究を行った A・ワトソンが、先行研究がこれに与えてきたような重要な歴史的意義を認めることができないとする新たな見解を提示しており、通説的理解が充分なものであるとは言えなくなっている状況にあるように思われる。このような研究の現状を受けて、本報告では、ワトソン説の検討も行いつつ、アウレリアヌスの太陽神崇拝について改めて考えた。

本報告の核となる議論は、アウレリアヌスの太陽神がそもそもどのような神であったのかということにあった。先行研究は、これをエメサの太陽神ソル・インウィクトゥス・エラガバルスであると専ら見なしてきたが、これを伝える史料が、その史料価値の疑わしい『ヒストリア・アウグスタ』のみであることから、報告者はこの説を否定し、より信頼のできるゾシモス（5 世紀のビザンツ時代の歴史家）によりつつ、アウレリアヌスの太陽神がパルミラで崇拝されていたペール三位一体神の 1 人である、ヤルヒボールと呼ばれる太陽神であった可能性を示した。したがって、このヤルヒボール神を祀る神殿が、ローマに建てられた「太陽神神殿 *templum Soli*」であったのであり、その祭祀を司ったのが「太陽神神官 *pontifices dei Solis*」であった

と考えられるのである。そして、このアウレリアヌスの行為がパルミラに対する戦勝記念としての色彩の強いものであったこともあわせて指摘した。

しかしながら、一方で、アウレリアヌスが、パルミラ遠征に先立つ 273 年頃から「不敗の太陽神のために *Soli Invicto*」と銘打たれた貨幣を帝国各地の造幣局から発行し始めたことも確かな事実である。先に述べたように、先行研究は、この貨幣発行をアウレリアヌスの太陽神崇拜国教化の第 1 段階として位置付けてきた。しかし、本報告が引き出した結論から考えるならば、貨幣に見られる「不敗の太陽神」とローマに祀られた「パルミラの太陽神」は、別の神であったのであり、貨幣発行と太陽神神殿建立は、直接的に関係のない、別個の行為と見なさねばならない。単に *Sol* としてのみ表現される太陽神と *invictus* の形容詞の付く太陽神とは、別であったのである。また、そもそも「不敗の太陽神」に対する貨幣は、アウレリアヌスに先立つガリエヌス帝の治世（253 – 268 年）以後、発行され続けていたことも見逃してはならない。

以上の本報告の内容を簡潔にまとめるならば、次のようになろう。アウレリアヌスの太陽神崇拜については、これまでの先行研究によって、貨幣発行から神官職設置までの行為を一まとめにして、同皇帝による太陽神国教化政策として位置付けられてきた。しかしながら、本報告では、「不敗の太陽神」の貨幣発行と神殿建立や神官職設置とは、別々の行為として分けて理解する必要があることを指摘した。後者は、アウレリアヌスのパルミラ戦勝記念のための措置であり、前者は、ガリエヌス以来の継続的な側面が強く、またあくまでも「不敗の太陽神」の貨幣であったのであり、単に太陽神と表現されるパルミラ起源の太陽神とは別物であるとの結論に達した。したがって、一連の行為と見なされてきたアウレリアヌスの行動は、そうではなかったことになり、そこに特別な宗教的意義を認めることはできないのである。ただし、一連の行為の背景に、アウレリアヌス帝自身の太陽神信仰があったこと自体は否定できないが、アウレリアヌスの宗教政策に、太陽神一神教や太陽神をローマ帝国の最高神に据えようとする思想を見出そうとすることは、キリスト教と異教との対立が明らかになった 4 世紀の事情を過去に投影した時代錯誤な見方であったと考えるべきであろう。